

本誌ページで、寄付依頼および教育里親呼びかけを致します

C. P. I. は、頑張っている青年たちを応援しています

奨学生卒業の教師たちとの関係を考える

22 年間インドネシアと関わってきて、教育里子から教師になった人々が、教育里親制度プログラムをどのように考えているか、じっくりと聴く機会がなかった。

今回は、数人にインタビューできたので、実際の気持ちを聞いてみることにした。

結論から言えば、彼らは、自分たちの昔の境遇、そこから頑張って抜け出した経験から、C. P. I. の教育支援に対する感謝の気持ちを誰よりも強く持っていることがわかった。

日頃、生徒たちと接している中で、成績がよく積極的な子どもが家庭の状況により学業困難になる生徒がいれば、昔の自分と重ね合わせて考えてしまうとのこと。

では、彼らを次世代の地域リーダーにすれば、プログラムがうまくいくのだろうか？
本音を聞くのは時間がかかったが、これからの関係の深め方が見えてきたと思うので、本誌で報告を行う。(P 3～4)

国や地方政府との取組みを考える

本年、ジャカルタの C. P. I. 現地事務所に、インドネシアの国会議員数名が訪問して下さり、その中に予算委員会の有力議員がおられた。

「C. P. I. がこの施設を造った理由をスマランの議員から聞いたので、伺った。インドネシアに友好的な日本の民間専門家と地方政府を繋ぎ、効果的な地方振興を進めようとのことなので、我々が協働できる道を話し合いたい」とのこと、ありがたい話である。

その方々はまた、12 月 15～19 日に来日。資源を守る漁業のあり方、安心できる牧畜、工業の安全環境、交通渋滞解消において、日本人の専門家との協力可能性を視察される。これらは、地方の経済環境を向上させ、地方振興を行おうとする若者たちを応援するためには国として必要な事柄である。

地方を振興したい青年たちを応援する仕組みを、具体的に進めてきたことを通して考えてみたい。(P 5～6)

ご協力お願いします



インドネシア語を含む四カ国語版の、レベルの高い折紙テキスト(日本折紙協会編纂)を、教育里子の学校および協力校、計1,000校を目標に頒布を行い、教育に役立てて頂きます。いままで200校に400冊頒布でき、有難うございます。
また、同協賛寄付(一冊千五百円)から、経費を除く全額をもって、母子家庭の救援活動を行います。
日本折紙協会、現地女性団体、在インドネシアの日本の方々からご協力を戴けることになりました。
C P I の会員の皆様には、この活動にご協力を頂きたく、以下の要領で申込をお願いします。
同封の郵便振込み申込書に、ご記入頂き、お振込み下さい。
テキストの国内郵送または現地配布を行います。

走り出したコミュニティカレッジ

地域経済が期待するモデル校

チアンジュール市の商工会議所会長氏は、
「このようなコミュニティカレッジは、雇用促進に効果
があると同時に、地域の経済界の人材確保に大い
に寄与すると期待している」

と語った。

チアンジュール市は、米どころ、養魚場または養鶏
場の多い地域として知られているが、近年では、ジ
ャカルタから比較的近く(ほぼ二時間)真面目な
人々が多いことから、中規模工場が進出している。
しかし、企業の求める技術が、必ずしも実務学校の
カリキュラムと合うわけではないので、雇用の後で教
育を始めなくてはならず、企業側からすると無駄が
多かった。

コミュニティカレッジ(米国型)は、この問題
を解決するものである。

適切な技術をもった教師の確保の点で、まだま
だ満足とは言えないが、C.P.I. 小西会長は、日
本の東京都に米国型コミュニティカレッジを導入
して生涯学習教育を定着させる仕掛人のひとり
でもあった経験から、

「モデル校の将来に自信をもっている」と、
今後が楽しみとのことだ。



毎年 30 名は、教育里子を入学させたい

教育里親募集中

教育支援の新しい形のパイロット

私たちが設立したコミュニティカレッジは、ひとつ
の学年 120 名ほどの規模である。経営的には
22名の教師をかかえるためなかなか大変だが、
モデル校の期待があるため、地方政府からの支援
もあり、頑張っているところだ。
最終ページに掲載した技能奨励会の本拠もここに
置くので、じわじわと有名にしていきたい。

一学年のうち30名は、教育里子をおきたい
と考えているので、教育里親さんを募集中。

希望就職の機会が飛躍的にあがる

過去、高校出の男子生徒の就職斡旋に苦しんで
きたが、コミュニティカレッジの場合、希望就職の機
会は飛躍的に向上する。教育支援の成果もあがると
いうものだ。このあたらしい形の教育支援に、日本の
経済界の方々の支援をお願いしたいところだ。



奨学生であったことを生かす～マランのフィトリさん～

マランの小学校で教鞭をとる フィトリさんは、
「子どもたちは、素直で可愛い」
と顔をほころばせる。本人もとても魅力的だ。
毎朝、銅鑼の音を合図にお祈りから始まる一日。
「自分の、C.P.I.の里親さんのことは、忘れない」
というが、なかなか手紙を書くことができないらしい。
「インタビューに来て戴いてよかった」
子どもたちと接するとき、奨学生だったことで良かったと思うことはありますか？

「子どもの中には、突然学校を休む子がいる。普通なら叱るところだが、私は、家庭に事情があるのだろうなと思ってしまう。その子の気持ちに降りていくことができる。自分の子どもの頃の気持ちで、そういう子どもたちとはなすことができる。ほんの少しの励ましが、子どもを立ち直らせることになる。C.P.I.の奨学金は決して多い額ではなかったけれど、



プライドをもたせてくれた。日本の方から、毎日、あなたを信じていると言われているようで、そのことが嬉しくてがんばることができた。だから、私も子どもたちがプライドを持てるように接している」
とのことだった。
おかげで、こちらも嬉しい気持ちで学校をあとにすることができた。

日本とのつながりを深めたい～ボゴールのラティさん～

昨年(2009年)の日本丸搭乗者に選ばれて来日したラトナさん。日本丸の停泊地での研修予定を打ち合わせて里親さんに会う機会をつくろうとしたが、日程があわなかった。「わたし、秋山さんとお会いしたかったです」とラティさん。里親さんから、丁寧な手紙がきて、会えなかったことがも残念そうだった。ボゴール農業大学の講師をしている彼女は、日本の奨学金を受けて以来、日本に憧れてくれた。「インドネシアは、農業で日本と協力し合うときがくると思っています、ですから、日本の農業のことも、もっと知りたいし、いろいろな基準の違いも勉強したい。農業は国際化しているから」と話していた。
「日本のお米は、気候にあわせて改良されて今のようになったと聞いている。インドネシアの気候に合わせて、日本の方の好きな味に改良すれば、よい

農業協力になっていくのではないのでしょうか」とは、心強い。
このような教師を応援していく専門家が動きやすくなる体制が、日本側に育てていきたいと思う。
「里親さんにぜひボゴール大学において戴き、私が研究していることをご覧戴ければうれしい」と伝えてくれるよう、頼まれた。



ジャカルタのC.P.I.施設のオープニングにて

教え子に新鮮な話をしたい～ジョグジャカルタのシギットさん

写真は、2008年のインドネシアフェアで来日したときのもの。

「日本でボランティアの若い人たちと出会えたのが、本当によかった」とシギットさんは話す。彼の家庭はとても貧しかったが、親御さんは彼の能力を信じ、なんとかか上の学校に行かせたいと望んでいた。C.P.I.は、その意を汲んで彼に奨学支援を大学を出るまで続けた。小西会長によれば、「あんなに生意気な学生は他にいなかった」とのことだが、いまや小西会長が最も信頼する卒業生に育ち、「若者と切磋琢磨するはめになるとは思わなかったが、おかげでC.P.I.を成長させることができた」と会長に言わしめている。

2009年から高校の教師となり、学生に頼られる“兄貴分”である。なによりも、授業の合間の話がおもしろい（生徒たちの評）そうだ。



「これまでに、C.P.I.の交流プログラムで、日本の若者たちといろいろな経験をさせてもらったことが財産」教え子に新鮮な話をできるとのことだ。

将来は地域リーダーになってくれるのだろうか？「そうしたい。でも。自分もまだまだ裕福なわけではない。今はリーダーのスティクノさんに負うところが多いので、C.P.I.には、運営実費の支援を続けてほしいと願っている」と、率直な注文があった。

日本語を少しは知らないと…ブミアユのフィトリアナさん

ブミアユ地域は、地域リーダー夫妻が卒業生の才能を大切に育てようとしているために、よい人材が手伝ってくれている。

フィトリアナもそのひとり。

高校の教師になった彼女は、親切で丁寧な授業で生徒たちの信望を得ている。

「ちょっと恥ずかしいことがあるのです」

とはにかみながらの告白は、日本と関係があるのに日本語をまったく知らないことだそう。

「習おうとしたことはあるのですが、何故か英語の方に勉強がいつてしまつて……」

日本人がいない地域であることもあり、学習の機会を逃したとのこと。

「でも、いまからでも、DVDとかで勉強すれば、マスターできると思う」

教育里子から教師になった人は、フィトリアナの

ように話してくれることが多い。

本気になって手助けを考えた方がいいと思い、目下、国際交流基金あるいはジェトロの日本語支援室と話し合っている。

真剣に対処を考えてほしいところだ。



中央、地域リーダー夫妻と小西会長の間

歩いてみました

スマラン高地土地なし農民向上プロジェクトのその後



2005 年から 2007 年まで行った中部ジャワスマランでの高地土地なし農民に対する生活向上プロジェクトは、世界銀行の支援プロジェクトとして、優秀な成果を得た事業とされた。

この写真は、今年 3 月に撮影したものである。

国会の、開発委員会からの視察を受けて農民たちと会談し、灌漑パイプの敷設の様子、育成した果樹園、果樹の間に野菜を植えて土地の有効活用を図っている例などを視察した。

このプロジェクトでの要点は、主に3つある。

- 1) 地方政府の土地を、意欲のある土地なし農民に、優遇された条件で貸与したこと。
- 2) 当初から運営の軸を、農民たちによって選挙された組合に置いたこと。
- 3) 果樹の育成その他で優秀な成果をあげた農民を、全体の教師として進めたこと。

PPKIJ は、インドネシア内の専門家により農民たちに対する果樹選定・その育成に係る能力開発をおこない、C.P.I.から小西会長が、住民参画型開発の専門家としてコンサルタントを行った。(C.P.I.の受託事業として既に事業報告済)
今年の後追い視察により、いくつかの改善点が見つかったので、現地組合が改善に入る。

それにしても、8 割方の参加者が予想された成果をあげてくださったことは、うれしい限り。

意欲あふれる住民と、専門家の責任ある協力、地方政府の真剣な取り組みがあれば、貧困救済プロジェクトは確実に成功できる。このプロジェクトを手伝った教育里子卒業者たちとともに、よいモデルづくりができたことを喜びたい。



被災地母子家庭救援ご寄付を受けた活動の報告

地方政府は。C. P. I. との連携に積極的です



望まれている新しいコミュニティづくり

被災者、とくに男手に収入を頼ってきた家庭が持続的自活に向くためには、住居に軸を置く行政的なコミュニティとは別に、新しい働き手の『働く場所』に軸をおくコミュニティを形成する必要がある。

子どもの保育・学校のことも考えなければならず、能力開発を効果的に行える必要があるからだ。対象となる母子家庭の人々の多くは、住居も移したいと言っている。

土地の手当ては地方政府に負うところ大

従って、そのようなコミュニティ形成には、土地あるいは建物の手当て、マイクロファイナンスが、能力開発と併行して行われることが必要である。土地に関しては、右の写真のキャプションにもあるように、持続的自活に適した製作活動にも大事である。

地方政府は、相当の理解を示している

地震被災地の地方政府は、土地の優遇的貸与について理解を示し、候補地を提示してくれた。



テストケースとして、竹籠の制作が行われている。塗料を選ばないと、すぐに壊れてしまう。



竹籠の制作にも、材料置き場として総統の土地が必要である。

具体的な計画提案に入っています

現在、竹籠ほかいくつかの製作プログラムで必要な土地・建物に係る提案を、パイロット製作を行いつつ、具体的な計画提案を行っている。

日本政府にもコミュニティ開発無償というスキームがあるので、検討を働き掛けたいところだ。

折紙テキストを200の学校に贈りました

昨年来、インドネシアの中学・高校に、インドネシア語を含めた4ヵ国語で説明されている講師養成用の折紙テキストブックを、各二冊ずつ200校に贈ることができました。

一冊1,500円でC.P.I.会員ならびに日本折紙協会会員のみなさまに協賛して戴いたお陰です。

インドネシア人は、もともと草や竹で編む工作に長けていますし、バティックや彫金細工にもみられるように手作業に器用な民族です。

C.P.I.と日本折紙協会が2009年にジャカルタで折紙フェスティバルを催したときも大変に関心を呼びました。ワークショップが盛況だったことも記憶に新しいところです。

NASAでも採用されている折紙技術を、途上国の学校を中心に広めて戴き、日本からの若いインストラクターが喜んで教えてあげられる場をつくりたいとの話を日本折紙協会の専務理事、

佐野さんで行ったのが、一昨年2008年のことです。それから二年経ち、早くも200校に布石を打つことができました。

いよいよ、日本の誇る折紙文化をひろめていくという目的をもって、日本の若い人々がインドネシアの学校で楽しく活動できる日が来ています。

日本語教師として入る方々も、折紙を教える技術をもってらしたら、より楽しく日本語も教えることができるのではないのでしょうか。

テキストを贈った学校から、ぽつぽつと使い方などに関する手紙がきます。ご寄付下さった方に、こちら、ぽつぽつとお送りしています。一気に送れず、すみません。

教育里親募集中

先生たちの期待に応えたい

テキストを贈ってから最初に学校から届いた手紙は、「テキストが届いた。C.P.I.が当校の生徒に奨学支援をして下さっていることに感謝をしている。現在、同じように貧困家庭で優秀な学生が数名いるので、支援をご検討願いたい」というものであった。推薦する学生の成績表やプロフィールが添えてあった。

その手紙をご寄付の方に送ることはできないので、学校には「次期の奨学生として検討する」旨を伝え、『テキストの使い方に係る手紙にしてほしいと依頼した。

しかし、学校側の生徒に関する思いはよくわかるので、教育里親を増やしたいと願っています。



2009年に行った、折紙のワークショップ。

一枚の紙から作りだす造形を教えていくことは、日本文化を知らせ、日本との関係を向上させるよい形である。

テキストを贈る学校を増やし、日本文化ファンを広げたいと思う。



**インドネシア
現地事務所から**



教育里親さん 募集中



チアンジュールの寄宿舎付き学校

C.P.I.は、国税庁認定の NPO 法人です。

企業は、C.P.I.への寄付金の経費算入を認められています。

個人の方も、このたびの税制改正で、2011 年一月からのご寄付は、確定申告で
ご寄付の半額が税金から直接控除できるようになります。

いま、チアンジュールで開始した独自の高等学校（コミュニティカレッジ）
で、地域経済に即した技能習得を目指し就職率を高める試みをしています。
この学校に通わせたい、貧困家庭で大学までは行けないが成績のよい学生を
来年のために30名選びました。

また、折紙テキストを積極的に活用することになった学校からも、奨学生
を増やしてほしいとの要望があります。

ところが教育里親さんが不足して、これらの子どもたちへの奨学金の捻出
に困っています。C.P.I.会員の皆様、インドネシアに関係する企業のみなさま、
折紙テキストの供与に協賛して下さった皆様、教育里親さんを見つけてく
ださい。教育里子ひとり当たりのご納入は36,000 円です。

寄付控除が認められている NPO 法人の中では、最もリーズナブルな金額です。
新しい年の初めに、「ひとり一人の国際協力」を勧めて下さい。
お願いいたします。